

初級日本語コースのシラバスと副教材作成の試み
——ネチャーエワ著『初級者のための日本語』
に準拠したシラバスと会話シートの開発——
(Разработка учебной программы и вспомогательного
учебного пособия на основе учебного пособия:
«Японский язык для начинающих» Нечаевой Л.Т.)

阿部 弘
АБЭ Хироси

1. はじめに

ロシアの高等教育は 2009 年 2 月、大きな転換点を迎えた。ロシア連邦政府政令により、高等専門教育の「連邦国家教育スタンダード」¹が承認され、その導入が決定した。これを受け、ロシアの高等教育機関（大学）は、5 年制（専門士）から 4 年制（学士）・2 年制（修士）の制度へと移行した。この変更に伴い、ロシアの高等教育機関では新しい教育プログラムが開発され、試行錯誤しながらも各専門教育が行われている。なかでも、日本語を専門とする高等教育機関では、シラバス改訂の際、慎重な作業が求められた。日本語科目の時間数が多く、急激な時間数の減少により、目標到達度のレベルが落ち、教育体制に支障がでる可能性があったためである。したがって、シラバスは総学習時間の変更に合わせて、改訂を余儀なくされた。効果的な教育プログラム作成には、新シラバスの暫定的な導入、大学が要求する基準との合致、学習目的の達成、学生のニーズ、教材などを検討する必要がある。そうする

¹ 「連邦教育スタンダード」については以下を参照。

Министерство образования и науки Российской Федерации. Приказ от 20 мая 2009 г. N 541. «Об утверждении и введении в действие федерального государственного образовательного стандарта высшего профессионального образования по направлению подготовки 035700 Лингвистика (Квалификация (степень) “Бакалавр”)», 岩崎正吾・関啓子 (2011 年) 『変わるロシアの教育』東洋書店。

ことによって初めて、教育スタッフ全員がプログラムの重要性を認識し、4年間で高い日本語能力を擁する学生の養成という目標に向かって教師、学生が意識を同じくすることが可能になる。また、既存の教材では多様化する学習目的や新たな日本語教授法に対応することが困難になっている。その状況を改善するための試みとして、本稿では、ロシアの日本語コースデザイン的主要教材として使用されることが多いネチャーエワの『初級者のための日本語』(Нечаева Л.Т. Японский язык для начинающих.)を分析し、その不足項目を補うためのシラバスと副教材の開発を試みる。

2. 背景と目的

ロシアの5年制教育（専門士）においては、特に大学の東洋学科日本語コースでは、伝統的に実際の言語運用能力よりも理論面の教授に重きが置かれてきたが、4年制への移行による学習時間減、そしてロシア社会の変化に伴って多様化する学習目的などを考慮する必要性が高まってきた。

従来、日本語コースのシラバス作成は、まず、ロシア連邦教育省が定める学習時間数を計算して表を作成し、使用教科書の各課をそのままシラバスの枠内に当てはめるといったものが多かった。初級に関して、主教材として使用されてきた教科書の代表格はと問われれば、第一にネチャーエワの『初級者のための日本語』(全2巻)が挙げられるだろう。この教科書は、ロシアの高等教育機関の日本語の基礎を総合的に学ぶ「実践日本語」、「基礎日本語」などといった科目でよく使用され、教育プログラム、シラバスの基礎に据える教育機関が多い。特に『初級者のための日本語』は、日本語の基礎を学ぶための学習項目が網羅された、ロシア本国でロシア人の専門家によって編まれた唯一の教科書である。(1)ロシア語による詳細な解説がある、(2)シラバス作成が容易である、(3)経験の少ない教師でも使用しやすい、(4)大量の練習問題がある、(5)国内調達が可能のため大学図書館が学生のために一括購入しやすい——などの理由から、これを主教材に据える教育機関が多かった。

しかし、その反面、日本語コースのスタッフ間で、学習目標や効果的なシラバス作成、授業活動について十分な話し合いがされてこなかったのも確かな事実である。現在、4年制（学士）の日本語コースに合致した教材は未だに開発されていない。そこで本稿ではネチャーエワの『初級者のための日本語』を分析し、不足していると思われる項目を洗い出すとともに、欠落部分を補うためのシラバスと副教材の開発について論じてみたい。そして、ネチャーエワの『初級者のための日本語』を主教材として用いる場合、学習時間減や多様化するニーズに対応するためにはこれまでのシラバスをどのように加除訂正し、どのような副教材を用いるべきかを考察し、そのシラバスと副教材の一例を提示してみたい。

3. ネチャーエワ著『初級者のための日本語』（全2巻）の概要と分析

3-1. ネチャーエワ著『初級者のための日本語』（全2巻）²の概要

ネチャーエワの『初級者のための日本語』は日本語の基礎を総合的に学ぶ初級段階の科目「実践日本語(Практический курс японского языка)」や「基礎日本語(Базовый курс японского языка)」の主教材として、ロシアの多くの大学で正式に採用されている。本教科書が採用される理由については本稿第2節で詳述したが、その他にも、日本で出版された教科書の場合、各教育機関の教務課がその内容を十全に把握できないため、大学側の認可を取り付けるのが困難であるという実際的な理由も考えられる。

ネチャーエワの『初級者のための日本語』は、1999年に国際交流基金の援助を受けて出版された。日本語学を専門とする学生用に執筆され、2巻からなる。1巻目は1～18課、2巻目は19～30課で構成されている(すなわち全30課

² Нечаева Л.Т. Японский язык для начинающих. Часть 1. 2001г., Издательство «Московский лицей»; Нечаева Л.Т. Японский язык для начинающих. Часть 2. 2002 г., Издательство «Московский лицей».

初級日本語コースのシラバスと副教材作成の試み（阿部）

となっている)。設定される総学習時間数は 500 時間である。各課に割り振られている時間は 12～18 時間である。各課の主目的を損なわない程度に内容を取捨選択(たとえば、練習問題の一部を端折るなど)すれば、速習コースにも十分対応できるようになっている(もしも各課にかかる時間を 12 時間とすれば、360 時間で全 2 巻を終了できることになる)。また、本文中のテキストを録音した CD が付属している。

全課はすべて、(1)文法解説、(2)語形成、(3)語彙、(4)イントネーション、(5)漢字導入、(6)モノログとダイアログ形式のテキスト、(7)練習問題の語彙リスト、(8)注釈、(9)課題と練習問題、という構成になっている。

各課を分量的に前半と後半に分けるとすると、(1)～(8)が前半部、(9)が後半部となろう。

(1)文法解説では、その課でとりあげられる文法事項に関する解説がロシア語で詳細になされており、例文も豊富に付されている。

(2)語形成では、テキストに出てくる熟語やコロケーションなどが解説されている。

(3)語彙では、テキスト中の新出語彙がロシア語の翻訳付きで提示されている。

(4)イントネーションでは、特に注意を払うべき日本語の音声学的な問題が取り扱われている(二重母音・母音の無声化・音便・アクセント、等々)。

(5)漢字の場合、1～2 巻合わせて 594 の漢字が導入される。漢字には音・訓読み、意味、部首、部首番号が付されている。本教科書では漢字の書き順は示されていない。ちなみに、1～5 課では「ひらがな」だけが使われ、6～8 課で「カタカナ」が導入される。「漢字」の導入は 6 課から始まり、課を追うごとに導入される漢字の量が増えていく仕組みになっている。少しずつ漢字を増やしていく方法により、学生の暗記の負担を軽減するのが目的であろう。

(6)モノログ形式のテキストとダイアログ形式のテキストは、6 課から導入されている。テキストに登場するのは、日本の大学で学ぶ 2 人のロシア人学生である。各テキストには、テーマ、場面、様々な位相、状況、技能、ロシ

ア事情などの学習項目が盛り込まれている。テキストの場面設定とテーマはすべて実際の言語活動に即して作成されている。1巻目のダイアログはすべて「です・ます」体で書かれ、2巻目のダイアログはすべて登場人物の年齢や交際レベルにあった文体、フォームで書かれている。モノログ、ダイアログ双方のテキストには現代日本のレリアが反映されていることはもちろんであるが、ロシア事情に関するテーマも登場する。ロシアに関するテーマが取り上げられているのは主として、モノログ形式のテキストにおいてである（例外は20課の場合で、そこでは交通を題材としたダイアログにもロシア事情が反映されている）。これらのテキストには翻訳とアクセント記号付きの語彙リストがついている。ロシア関係の主なテーマは次のようなものである——「ロシアの気候」、「ロシアの交通」、「ロシアの地理」、「ロシアの名物」、「サンクトペテルブルグ」、「スポーツ」、「ロシアの食べ物」、「モスクワ」、「ロシアの祝日」、「ロシアの政治制度」、等々。

(7) 練習問題の語彙リストでは、練習問題中の新出語彙がロシア語の翻訳付きで解説されている。

(8) 注釈は、言葉のエチケットや話し言葉の特徴、語彙使用の特徴、慣用句の翻訳などについての説明、紹介となっており、どちらかといえばコラム的な要素が色濃いと言えよう。

(9) 「課題と練習問題」³は、分量的に各課の後半部となるが、決められた順序で連続性を持って導入される。「課題と練習問題」は、イントネーションから始まり、語形成、文法、語彙と続き、最後は漢字の読み書き問題へと到るが、19課からはイントネーション関連のものが省かれ、いきなり語形成に関する課題と練習問題から始まっている。

³ 同教科書の練習問題については以下を参照。*Нечаева Л.Т. Методические основы учебника «Японский язык для начинающих»*. 2002 г. // Япония. Язык и культура. Альманах. Муравей. С. 129-136.

文法の具体的な現象を取り上げる練習問題は「文法」という項目で理路整然と解説される。文法の練習問題は多様で、「品詞の活用を問う問題」、「提示された語の中から適当な文型を選ぶ問題（助動詞など）」、「空欄穴埋め問題」、「文をつなげる問題（主節と並列節・従属節）」、「接続詞を選ぶ」といった具合である。

文法の練習問題は各文法項目の学習後に必ず行われる。文法項目の難易度が低い場合、練習問題は1つ、もしくは2つだが、重要な文法項目で確実な定着が求められる場合にはそれ以上の練習問題が課されている。文法の練習問題には、ロシア語から日本語へ、日本語からロシア語への翻訳問題も含まれている。

語彙の練習問題は文法の練習問題の後におかれている。この問題は主に、対義語や類義語の選択、語彙リストからあるテーマの語彙を選択するという形式である。

会話能力の習得にも大きな比重が置かれている。そのため話し言葉の習熟を促進させ、活性化させるような課題が盛り沢山である——「ペアになって、対話を再現しなさい」、「語彙リストの言葉を使用して、指定されたテーマについて話しなさい」、「絵について説明しなさい」、「絵に関する問題を作りなさい」、「～について話しなさい」等々。

漢字の練習問題では、音・訓の読み方双方を習得できるようになっている。さらに、様々な日本人の名字も読めるように配慮されている。

練習問題の全体像については、ここでは一例として第16課を取り上げ、その内容一覧を<資料1>として本稿末に付してあるのでそちらを参照願いたい。

3-2. ネチャーエワ著『初級者のための日本語』の分析

前述したように、30課中6課以降は同じ内容構成であることから、ここでは次の2点に分けて分析することとする——(1)1課内に盛り込まれている内容の配列の仕方とその特徴、(2)課題と練習問題。

(1) 1課内に盛り込まれている内容の配列とその特徴

分析するに際しては、分析結果を読み取り易くするために、1課分の教材構造図を作成することとした。教材構造図の作成は、『教材開発』島田・柴原（2008）⁴と『教材設計マニュアル』（2004）を参考に、以下の手順で行なった。

- ① 1課内の内容をすべて抽出し、図式化する。
- ② ガニエの「9教授事象」に照らし合わせながら、1課内の内容の配列を「導入」、「展開」、「まとめ」に分類する。
- ③ 「展開」においては関連性が高い事項をグループ化する。「展開」とは、「新しい学習項目を解説し、それについて練習を与え、定着を確認する（情報提示と学習活動）部分」をいい、この部分をひとかたまりとしてとらえ、1つのグループとする。
- ④ 「導入」で提示された学習目標を一番上に配置し、目標に関連する課の「展開」部分の内容を目標の下に配列する。③でまとめたグループごとに配列を考え、最後に「まとめ」の部分を配置する。
- ⑤ 全体の配列を見直して、構造図を完成させる。

ちなみに、ガニエの「9教育事象」とは、教師がどのように教えると学習を支援できるかという指導方略をまとめて整理したものである⁵。「9教育事象」を語学教材で通常使用される「導入——展開——まとめ」という分類枠に当てはめると以下のようになる。

*「導入」 1. 学習者の注意を引く。2. 授業の目標を知らせる。3. 既習項目を思い出させる。

「導入」では学習者を教材に引き付け、続いて当該授業の学習項目を示すとともに、既習の学修項目を思い出させる必要がある。

*「展開」 4. 新しい学習項目を提供する。5. 学習方法を提供する。
6. 練習の機会を提供する。7. フィードバックする。

⁴ 島田徳子・柴原智代（2008）国際交流基金日本語教授法シリーズ14『教材開発』ひつじ書房、29-37.

⁵ ガニエの9教育事象については、鈴木克明（2004）『教材設計マニュアル』北大路書房、77-79.を参照。

初級日本語コースのシラバスと副教材作成の試み（阿部）

「展開」では、新しい学習項目を解説し、それを定着させるため、学習者に練習させ、誤りがあれば訂正し、その結果をフィードバックしなければならない。

*「まとめ」 8. 学習の成果を評価する。9. 保持と転移を高める。

「まとめ」では、学習者が学んだ項目が定着したかどうかを評価し、忘れないように繰り返し復習させなければならない。

さて、先の手順に従って作成した教材構造図は、以下に示す<表 1>の通りである。

<表 1>

導入	なし							
展開	文法		語形成・ 語彙		イントネー ション		漢字	
	課 題	練 習	課 題	練 習	課 題	練 習	課 題	練 習
	モノログ・テキスト				ダイアログ・テキスト			
	課 題		練 習		課 題		練 習	
まとめ	なし							

〈表 1〉の教材構造図を見れば一目瞭然であるように、そこには「導入」と「まとめ」に相当する部分が欠如している。「展開」に(1)文法解説、(2)語形成・語彙、(3)イントネーション、(5)漢字導入、(6)モノログとダイアログ形式のテキスト等の項目が列挙されているだけで、学習効果を考慮したうえで、課が構成されているわけではないことが分かる。

「導入」の欠如は、各課の学習項目に対する興味喚起の機会の放棄を意味する。その場合、学習者は、学習意欲も湧かず、学習目的も曖昧なまま、いわば五里霧中状態で授業を受ける可能性が大である。また、それまでに学んだ既習項目との関連性を確認する機会も与えられないことになりかねない。

また、「まとめ」の欠如は、新たな学習内容そのものの定着度、それに既習内容と融合した総合的な語学知識としての定着度の点検機会の放棄を意味する。その場合、学習者は、学習した課の学習成果を評価できないまま次の課へと進んでゆく可能性が大きいと言わざるを得ない。

その逆に、「展開」では、豊富な練習問題をこなすことによって学習者は十分な練習の機会を与えられる。そこには、「発音」、「語彙」、「漢字」、「文法」の練習問題があり、さらに「日本事情」と「ロシア事情」に関するテキストが一つずつあり、読解問題も付いている。翻訳問題もたつぷり用意されており、学習者はロシア語から日本語、日本語からロシア語へ翻訳する練習ができる。

(2) 課題と練習問題

ネチャーエワ教科書の大きな特徴として、「課題と練習問題」の豊富さが挙げられる。各課の文法、語彙・語形成、漢字、発音（イントネーション）、テキスト 1（モノログ）、テキスト 2（ダイアログ）の学習項目を練習・確認・発展させるため、全課に 40 の「課題と練習問題」がついている。

「課題と練習問題」の分析に際しても、島田・柴原（2008）の練習問題の分析法を使用した。同書によれば練習問題は、(1)練習の性質、(2)練習の活動形態、(3)練習の過程、という 3 つの観点から、次のように分析される必要が

あるという。すなわち、まずは練習問題に番号をつけ、その練習問題がどのような性質を持ち、何に焦点があてられ、どのような活動形態によって行われるのかを調べる。続いて練習の過程において学習者の頭の中でなにが起きているのかを、第2言語の習得過程に準拠しながら調べてゆく。練習問題はたんにインプット情報とアウトプット情報を与えるだけでよいというものではなく、インプットからアウトプットへの流れをシラバスに反映させることもまた必要である。またインプットもただ闇雲に情報を与えるだけでなく、背景知識などを利用し、「理解できるインプット」を増やすことが重要になる。「理解できるインプット」情報が理解し易ければしやすいくほど、それらは既習項目と統合されて学習者のアウトプット能力向上へと繋がって行くのである。アウトプットの際には必ず、それが正確なものかどうかを判断（モニター）する必要もある⁶。

分析結果の一覧は、以下に<表 2>⁷としてまとめたのでそちらを参照願いたい。分析の一覧表には、学習者に与えられるインプットの性質を見るため文法、語彙（語形成）、発音（イントネーション）、漢字（イントネーション）、テキスト①（モノログ）、テキスト②（ダイアログ）の学習項目も含めることにした。また、練習問題 32～40 までの問題は漢字の読み書きや同義語・反義語に関する問題なので、ここでは割愛した。

⁶ 第二言語習得過程については、以下を参照。Ellis R. (1995) Interpretation tasks for grammar teaching, TESOL Quarterly, 29 (1), 87-105. 大関浩美 (2011) 『日本語を教えるための第二言語習得論入門』くろしお出版。

⁷ 一覧表はひつじ書房のサイト http://hituzi.co.jp/nihongo_kyojuho/kikin_kyojuho_14kan/ よりダウンロードしたものを参考に作成した。

<表 2> 練習問題分析

	文 法	語 彙	発 音	漢 字	テ キ ス ト ①	テ キ ス ト ②	注 釈	練 習 ① か ら ②⑤	練 習 ②① か ら ②⑤	練 習 ②⑥	練 習 ②⑦	練 習 ②⑧	練 習 ②⑨	練 習 ③⑩ か ら ③⑪
(1)練習の性質														
教材中で学習者に与えら れるインプットの性質														
・絵/図形/番号によるか													○	
・文字による語/句/文か	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○		
・音声による語/句/文か														
・文字による談話か											○			
・音声による談話か														
学習者に期待されるアウ トプットの性質														
・絵/図形/番号によるか									○					
・文字による語/句/文か								○	○					
・音声による語/句/文か			○							○				
・文字による談話か											○			
・音声による談話か											○	○	○	○
(談話、会話なら 2 往復 以上、文は 5 文以上のや りとりとする)														

初級日本語コースのシラバスと副教材作成の試み（阿部）

焦点・情報源																	
言語形式に焦点があたっているか	○	○	○	○				○									
意味理解に焦点があたっているか								○	○	○							
意味理解と言語形式の関係に焦点があたっているか					○	○	○	○				○	○				
情報源は教材	○	○	○	○	○	○	○				○	○	○				
情報源は本人											○						○
情報源は他者（他の学習者/教師/リソース）											○						○
(2) 練習の活動形態																	
・学習者同士のやりとり																	
クラス全体							○										
教師と学習者	○	○	○	○	○												
ある学習者からクラス全体へ											○						
学習者の個人作業	○	○	○	○	○			○	○			○	○	○			
ペアワーク、あるいはグループワーク								○			○		○				○
・学習者の自発性																	
学習者の反応を要求せず	○	○	○	○	○	○	○										
学習者が指示された通りに答える/する											○	○	○	○			
学習者が考えて答える/する																	○

(3) 練習の過程												
インプットを理解できる インプットにする練習												
言語操作の訓練(自動化)								○	○	○		
運用力からアウトプット を引き出す活動												

<表 2>からは次のような問題点を読み取ることができる。

(1)「練習の性質」では、音声によるインプットがなく、音声による語、句、文のアウトプットが少ない。さらに、答えたり活動したりするための情報源が当該教科書以外にはない。

(2)「練習の活動形態」では、学習者が考えて答えを産出する活動がない。

(3)「練習の過程」では、インプットを「理解出来るインプット」にする練習と運用力からアウトプットを引き出す活動が少ない。つまり、読解問題のようなインプットに重点が置かれている問題は豊富にあるが、会話教材や作文教材のようなアウトプットに重きが置かれている問題が少ないということである。

著者ネチャーエワの言によれば、話す能力の習得に大きな比重を置き、「ペアになって、対話を再現しなさい」、「語彙リストの言葉を使用して、指定されたテーマについて話しなさい」、「絵について説明しなさい」、「絵に関する問題を作りなさい」、「(テーマ)について話しなさい」といったアウトプット重視の練習問題を多く組み入れたとのことであるが、そこには練習の目的が示されておらず、既習の文法事項や文型が実際のコミュニケーションにおいてどのような機能を担っているのかをはっきり認識できるような構造にはなっていないのである。

<表 2>に示されるように、言語能力のうち、特にやりとりなどの発話機能に関する活動が少ないことは明らかである。しかし、これは以前から言われている、ステレオタイプ的なロシアの外国語学習における弱点に過ぎない。

もつとも、ネチャーエワの著書にはそうした弱点を補って余りある特筆すべき長所も多々見られる。

そうした長所として第一に挙げるべきは、文法・語彙などの説明がロシア語で詳細に説明されており、学習者の負担が軽減されることである。第二に挙げるべきは、練習問題が豊富なため、教師が必要に応じて取捨選択ができることである。第三に挙げるべきは、様々な場面・機能・状況が盛り込まれていること、そして第四に挙げるべきは、日露双方向（ロシア語⇄日本語）の翻訳問題を含む練習問題が大量にあることである。長年文法訳読法に馴染んできたロシアの教師や学習者にとってネチャーエワの著書を使用し易くしているのは、こうした長所によるものと判断して間違いあるまい⁸。

4. 新たなシラバスと副教材の課題と必要性

以上の分析結果から、ネチャーエワの『初級者のための日本語』（全2巻）を効果的に使用するに際して、いくつか問題点をクリアしなければならないことが分かる。新たなシラバスと副教材を作成するために考慮すべき項目を箇条書き的に列挙すれば、以下のようなになるだろう。

1. 各課に「導入」と「まとめ」の部分を補足する。
2. 音声によるインプットとアウトプットの機会を与える。
3. 理解出来るインプットを増やす。
4. アウトプットを引き出す活動を増やす。
5. 発話機能を伸ばす活動（やりとり）を取り入れる。
6. 教科書の長所をいかす。

⁸ ロシアの日本語教育事情に関しては、①木谷直之「極東ロシアの大学生の言語観についてー海外日本語教師研修のための基礎データ作成を考えるー」、1998年、『日本語国際センター紀要』8号、95-109頁、②仲矢信介・稲垣滋子「ロシア・N I S 諸国への日本語教育支援再考」、2005年、『日本語教育』127号、日本語教育学会、51-60頁、③藪崎義雄「ロシアにおける日本語教育の現状と問題点」、2007年、『創価大学大学院紀要』28号、149-172頁を参照。

こうした項目を視野に入れながら、本稿第3節で詳述した「①1 課内に盛り込まれている内容の配列とその特徴」の問題点を解決するための「新シラバス」を、それに「②課題と練習問題」の問題点を解決するための「副教材（会話シート）暫定版」を作成してみることにする。その際、「新シラバス」と「副教材(会話シート)暫定版」はともに、まったく新たに作成するのではなく、『初級者のための日本語』の既成のシラバスおよび会話問題に改良・補足を加える形で作成することとする。理由は、現在、ロシア側が教育制度の移行に伴い、ロシアの伝統的な理論を活かしながらも、諸外国での研究成果を取り入れることによって新しい外国語教授法・教材の開発に努力していることに鑑み、それを尊重すべきだと考えるからである。したがって、「新シラバス」と「副教材（会話シート）暫定版」は、ロシアの「高等教育スタンダード」、「各高等教育機関の方針」、「各高等教育機関の採用教科書」を前提条件としてほぼ全面的に受け入れるという方針のもとに作成されることになる⁹。

4-1. 新シラバス

「新シラバス」作成に当たっては、「①1 課内に盛り込まれている内容の配列とその特徴」の分析結果として浮き彫りになった問題点の解決を――すなわち「導入」と「まとめ」の欠如の解消を目指さなければならない。

ネチャーエワの教科書は総合教材である。総合教材の場合、学習目標達成に必要な要素を柱としてシラバスを作成するのが常道である。Numan D. (2001)¹⁰によれば、シラバスの要素とは、① Title（題名）、② Goal（目標）、③ Structures（文型・語彙などの言語知識、言語構造）、④ Listening（聴解）、⑤ Pronunciation（発音）、⑥ Writing（作文）、⑦ Reading（読解）、

⁹ 先行するロシアでの試みとして、イリーナ・プーリク他による「ロシア一般人向け日本語コース用初級コースブック『どうぞよろしく I』開発報告」がある（『国際交流基金日本語センター紀要』9号、135-150頁）。高等教育向けではなく、社会人向けの日本語コース用教科書の開発例として参照すべき価値があるろう。

¹⁰ Numan D. Expressions. 2001, Thomson / Heinle.

初級日本語コースのシラバスと副教材作成の試み（阿部）

⑧ Recycling（復習）の 8 項目であるが、「新シラバス」の要素は、①タイトル(課)、②文法・文型、③学習目標、④パフォーマンス・タスク、⑤語形成・語彙、⑥表記、⑦テキスト（モノログ・ダイアログ）の 7 項目とすることとした。

Numan と「新シラバス」のシラバス要素を対照的に図示すると、以下の<表 3>のようになる（なお、Numan の④Listening（聴解）は扱わない）。

<表 3>

Numan のシラバス要素	新シラバス
① Title (題名)	①タイトル (課)
② Goal (目標)	③学習目標 ④パフォーマンス・タスク
③ Structures (文型・語彙などの言語知識、言語構造)	②文法・文型 ⑤語形成・語彙 ⑥表記 (漢字)
④ Listening (聴解)	——
⑤ Pronunciation (発音)	発音は課題と練習問題に含まれる
⑥ Writing (作文)	作文は課題と練習問題に含まれる
⑦ Reading (読解)	⑦テキスト (モノログ・ダイアログ)
⑧ Recycling (復習)	復習は課題と練習問題に含まれる

③学習目標は、教科書のダイアログ・テキストの内容を基に作成した。それにより、文法や文型をそのまま学習目標とせざるを得なかった教科書に学習目標を設定することができ、学習項目を意識化することができる。また、④パフォーマンス・タスクは、学習者にアウトプット活動に対する明確な目的意識を持たせ、学習意欲を喚起するため、設定することとした。タスク作

成には、「JF 日本語教育スタンダード」¹¹が提供する「Can-do」を活用した。2010年に公開された「JF 日本語教育スタンダード」は、欧州評議会による「言語のためのヨーロッパ共通参照枠」(CEFR)に大きな示唆を受け、「相互理解のための日本語」教育を提唱している。「JF 日本語教育スタンダード」は、「相互理解のための日本語」を理念とし、様々な教育現場が日本語の熟達度に関して共通理解を共有することにより、日本語教育の利便性を促進できると考えている。そして、言語の熟達度を共有するための具体的方法として能力記述文「Can-do」が開発された¹²。「Can-do」は、言語の熟達度を「～できる」という形式の文で示し、それを6つのレベルに分けたものである(初級=A1・A2、中級=B1・B2、上級=C1・C2)。「新シラバス」のパフォーマンス・タスクには、初級A1・A2の「Can-do」を利用した。不足しているアウトプット言語活動、特に発話のやりとりをシラバスに組み込むため、学習目標に合った「Can-do」を選び、シラバスに組み入れた。また、④パフォーマンス・タスクには、「実際に行わなければならないタスク」と「参考にしたCan-do」の項目をつけた。

「新シラバス」は全30課分を作成したが、スペースの都合上、第16課分のシラバスのみを表形式で提示することとする。第16課分の「新シラバス」は、本稿末に<資料2>として添付したので、そちらを参照願いたい。

4-2. 副教材(会話シート)暫定版

本稿第3節の「(2)課題と練習問題」の分析で明らかになった問題点を解消するためには「副教材(会話シート)」の作成が必須である。そこで各課に1つ、

¹¹ JF 日本語教育スタンダード 2010、(2010) 独立行政法人国際交流基金日本語国際センター事業開発チーム

¹² 森本由佳子他 (2011) 「コミュニケーション言語活動の熟達度を表す JF Can-do の作成と評価」『国際交流基金日本語教育紀要』第7号、25-42、JF 日本語教育スタンダードの「Can-do」については、「みんなの『Can-do』」サイト <http://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do> を参照。

もしくは2つの「会話シート」を追加し、会話練習の項目立てによって判明した不足部分を補うこととする。

会話練習項目立てにはガニエの「9 教育事象」モデルを参照した。（ガニエの「9 教育事象」については、本稿第3節を参照のこと）。以下に示す<表4>は「会話シート」の各トピックである。

<表4>

会話練習シートの構成（トピック）

1. 始める前に（学習者の興味を引く）。
2. 学習目標（授業の目標を知らせる）。
3. みんなでやってみよう・練習シート（既習項目を思い出させる）。
4. 会話を考えよう・表現と語彙（新しい学習項目を提供する）。
5. ロールプレイ（学習方法を提供する）。
6. ペアで練習してみよう（練習の機会を与える）。
7. 気づいたことを書こう（フィードバックする）。
8. 会話練習評価表（教師用：学習の成果を記録する）。
9. あとすこし（保持と転移を高める）。

「副教材(会話シート)暫定版」作成に当たっては、「新シラバス」の場合と同じく、『初級者のための日本語』第16課を取り上げることとした。「副教材(会話シート)暫定版」は日本語で作成されたが、実際の練習には初級学習者の負担を軽減するためロシア語訳、もしくはロシア語による説明がつくことを前提としている。第16課の学習評価は、会話練習評価表により行う。「副教材(会話シート)暫定版」と「評価表」については、本稿末の<資料3>を参照願いたい。

『初級者のための日本語』は各課の学習時間として設定されている12～18時間のうち、3時間（90分の授業×2）を使用して行われる。「副教材(会話シート)暫定版」で取り上げられるテーマは、第16課本文テキストのテーマと内容がほぼ重複するように作成されている。

「副教材（会話シート）暫定版」の構成は全部で9つの部分から成る。

「1. 始める前に」では、学習者の興味を引くために、簡単な会話をさせる。第 16 課の場合、友人宅への訪問がテーマになっているので、学習者の経験などを話し合ってもらい、授業のイントロダクションとするのが目的である。

「2. 学習目標」では、シラバスに設定されている学習目標を学習者に知らせる。学習の目的意識を持たせるためである。

「3. みんなでやってみよう・練習シート」は、ロールプレイ¹³の利用によって現時点で何ができるかを学習者に思い出させることを主目的とする。そのため「練習シート」（＜資料 3＞最終頁参照）を課題遂行に必要な語彙を準備させるために使用する。活動前に既習の語彙をしっかりと認識することにより、さらなる語彙の定着を計る。ロールプレイ活動には様々なタイプがあるが、ここでは、運用先行型のロールプレイ活動を行う。ロールプレイにより学習者は自分の日本語力に何が足りないかを理解し、学習の必要性を自覚できる。

「4. 会話を考えよう・表現と語彙」は、学習者に新しい学習項目を提供することを目的とする。「会話を考えよう」では対話の例を、「表現と語彙」では新出語彙を提示する。語彙は基本的に第 16 課本文で学習した語彙を使用するが、やむなく語彙が新出する場合は、新しい語彙としてロシア語訳とともに提示することとする。「会話シート」による活動において、改めて準備する必要はないように配慮してある。

「5. ロールプレイ」は、学習者の既習事項や新しく覚えた事柄を引き出すための方法として提供される。ここでのロールプレイは会話モデルの応用である。

「6. ペアで練習してみよう」は、ロールプレイで学んだ事を定着させるために設定されている。学習者はここで、練習の機会を与えられる。

「7. 気づいたことを書こう」では、学習者同士に簡単な相互評価をさせた後、間違えた学習者には訂正箇所を指摘したうえでフィードバックする。

¹³ ロールプレイのタイプと長所については、関正昭他編、尾崎明人他著（2010）『会話教材を作る』スリーエーネットワーク 80-83 を参照

「8. 会話練習評価表」は教師用で、会話練習が終わった時点で学習の成果を記録するために使用される。評価はシラバスのパフォーマンス・タスク欄に記述されている「Can-do」が遂行できたかどうかで判断する。「副教材(会話シート)暫定版」の評価は、通常の授業評価（会話シート以外の授業）とは別に行われる。具体的な評価項目は、「もうすこし（言えなかった場合）」、「できた（言えたが間違いがある場合）」、「よくできた（間違いなく言えた場合、もしくは自分で考えた表現でタスクを完遂できた場合）」の3段階とする。学習者は大学の教育プログラムによって評価されるため、「副教材(会話シート)暫定版」での活動については厳しい基準は必要ないと思料してのことである。また、ロシア人学習者、特に低学年のロシア人学習者は、ロールプレイのような活動を好まない傾向にあるため、その方が精神的な負担を軽減できると考えられるからである。

「9. あとすこし」は、会話シートによる練習後の復習のために使用される。そこで学んだ表現や語彙を反復しながら、学習項目の定着を再度確認するとともに、促進させるためである。

5. 期待される効果

これまでロシア国内の「日本語コース」におけるシラバス・カリキュラムは、学習到達目標、教師や学習者のニーズなどを軽視したものであり、効果的な教育活動が行われてきたとは言いがたい。さらには就学期間が1年間減少し、学習到達レベルを落とすことなく、現状のレベルを維持する必要性ができた現在、「新シラバス」の開発により、効果的な教育プログラムが運営できれば学習目標が明確になり、教師は何をどう教えるか、学生は何をどう学習するかが明確になり、効果的な授業活動が可能になると考えられる。

また、「副教材(会話シート)」を新たに開発できれば、学科の教育目標と学習者のニーズにも十分に 대응ができるようになるであろう。その副教材によってメインとなる教科書の弱点を補う形で活動を行えば、効果的な教育

プログラムの運営が可能になる。仮に4年間で「通訳」の資格を持った学生を養成しなければならない場合、大学はできるだけ効果的な教育プログラムを提供する必要がある。ロシアの場合、大学の専門が就職の際に重要視されるため、入学してくる学生は、大学在学時にレベルの高い語学スキルを身につけたいと希望する者が多い。ロシアでは伝統的な独自の外国語教授法が発達しており、その効果は一定の評価を得てはいるものの、文法訳読法や翻訳に関する領域に限定されていると言わざるを得ない。

外国語を専門とする学生にとって言語運用能力、とくにコミュニケーション能力は必要不可欠であるが、4年間で十分にアウトプット能力を伸ばすためにも早い段階から「読む・書く・聞く・話す」の4技能をバランスよく伸ばして行く意識づけが不可欠である。本稿で提案する「新シラバス」と「副教材(会話シート)暫定版」がネチャーエワの『初級者のための日本語』(全2巻)の不足部分をカバーし、それを新たな教育課程基準に即した教科書へと面目を一新させるための一助となってくれば幸いである。

<資料 1> 『初級者のための日本語』（全 2 巻）

第 16 課 練習問題 一覧

1	次の文のイントネーションを覚えなさい
2	次の動詞、イ・ナ形容詞の否定形を作りなさい
3	次の動詞に「～ましょう」をつけなさい
4	次の肯定文を否定文にかえなさい
5	次のロシア語の文を日本語に訳しなさい
6	次の文を推量文（～でしょう）にかえて、ロシア語に訳しなさい。
7	次のロシア語の文を日本語に訳しなさい
8	次の文に言葉を補い「移動の目的」を表す文を作り、ロシア語に訳しなさい。
9	次の文に「～に行く」をつけ、ロシア語に訳しなさい。
10	10、次の文を日本語に訳しなさい。
11	次の文の空欄に、「ぐらい」か「ごろ」を入れなさい
12	次のロシア語の文を日本語に訳しなさい
13	下線部の言葉が答えになるような疑問文を考えなさい
14	次の文を例のようにかえなさい
15	次の文を例のようにかえなさい
16	次の文を例のようにかえなさい
17	次の対話の下線部を入れ替えて話し、ロシア語に訳しなさい
18	次の時を表す表現に注意しながら、質問に答えなさい
19	時間を表すロシア語を日本語に訳しなさい
20	次のロシア語の日付を日本語に訳しなさい
21	あなたの家系図を描き、家族の歳や職業を言いなさい
22	あなたの友人の家系図を書き、家族の歳や職業を言いなさい

23	次の質問に答えなさい
24	左の文の（ ）の中に適当な助詞を入れ、右の文と意味があうようにつなぎなさい
25	次の言葉の類義語を書きなさい
26	次の対話を読んで、ロシア語に訳し、ペアで練習しなさい
27	下の表から「自己紹介」、「家族」、「夕食へ招待する」というテーマに関する言葉を選び、話を作りなさい
28	次の絵を説明しなさい
29	28で（他の学習者）が作った説明を聞いて質問をしなさい
30	自己紹介をしなさい
31	自分の友人やその家族について話しなさい
32～44	32～44は漢字の読み書きや意味、類義語に関する問題

<資料 2> 『初級者のための日本語』 第 16 課新シラバス

課	文法	文型	学習目標		語形成 語集	表記	テキスト
16	<ul style="list-style-type: none"> ・授受表現 あげる もらう やる くれる いただく ・疑問詞「か も/でも ・動詞「ある」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「～が上 手です」 ・「～が下 手です」 ・「～しか」 	<ul style="list-style-type: none"> ・家に招待され たとき、その 家で簡単な会 話ができる。 (教科書のテキ ストの内容が ら目標を作成) 	<p>パソナー・マンス・ タスク (参考にした CEFR/JF Can-do)</p> <p>・家に招待された とき、出された料 理について、簡単 な言葉で感想を言 うことができる。 (JF184/やりとり) 「みんなの『Can- do』サイト http://jstandard.jp/cando/top/ja/rendoより</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の 教え方 (ひとへ や) 接頭辞 ・和～ ・洋～ 	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字 22字 	<ul style="list-style-type: none"> 1. アンナの部屋 2. アンナの部屋

<資料 3> 「副教材(会話シート)暫定版」

会話練習

第 16 課

《1》始める前に（学習者の興味を引く）

・みなさんは友だちの家に遊びに行ったり、友だちを自分の家に招待したりしたことがありますか？その時、何をしましたか？どんな話をしましたか？

◎練習シートで言葉を思い出そう！（練習シートは最終頁を参照のこと）

《2》学習目標！（授業の目標を知らせる）

友だちの家に招待されたとき、その家で会話ができる。

《3》みんなでやってみよう（既習項目を思い出させる）

ロシア人

あなたはロシア人です。
あなたの家に日本人が来ました。
ロシアの食べものを出しましょう

日本人

あなたは日本人です。ロシア人の友だちの家でロシアの食べものを食べます。感想をいみましょう。

《4》 会話を考えよう（表現と語彙）

次の会話を読んでみましょう。

《4》-1 会話を考えよう（新しい学習項目を提供する）

田中 : こんにちは。達也です。
アンナ : あ、達也さん。ちょっと待ってください。今、開けます。
（アパートのドアを開ける）
アンナ : どうぞお入りください。
田中 : おじゃまします。
アンナ : 元気だった。
田中 : うん、おかげさまで。
アンナ : （リビングで）お茶をどうぞ。
田中 : ありがとう。
アンナ : ジャムもどうぞ。これはうちのダーチャでとったの。
田中 : アンナさんがつくったの。
アンナ : いいえ、母がくれたの。
田中 : いただきます。ああ、おいしいね。
アンナ : よかった。
田中 : 何のジャム。
アンナ : 木いちご。
田中 : アンナさんは自分でつくらないの。
アンナ : いいえ。めんどくさいから。私は食べるのが専門です。
田中 : そうだよな。私も食べるだけ。

《4》-2 表現と語彙（新しい学習項目を提供する）

アパート квартира リビング гостиная ジャム варенье ダーチャ дача 木いちご
малина

《8》ネチャーエフ『初級者のための日本語』 第 16 課

会話練習評価表 教師用（学習成果を記録する）

評価シート

発表者名

評価者

テーマ

	A 1 レベル	評価
活動 会話 1 やりとり	<p>友だちの家に行った時、出された食べ物について感想をいうことができる。</p> <p>参考： JF-Can do 184 活動 A 1 やりとり 社交的なやりとりをする （食生活） 友人と一緒に食事をしながら「おいしいですね」などの感想を言ったり、感想をたずねたりすることができる。</p>	<p>もうすこし できた よくできた</p>

コメント

《9》あとすこし(保持と転移を高める)

○もうすこし話しましょう。

・「私の好きな_____」

ロシア人

「私の好きな_____」について話してください。

日本人

「Aさんの好きな_____」について感想をいってください。



・「私の民族の料理」



Aさん

Bさんの民族料理について質問してください。感想も言ってください。

Bさん

Aさんの質問に答えてください。

・「お祭りのとき、何を食べますか」

日本人

ロシア人に、お正月の料理について、たくさん質問してください。

ロシア人

お正月の料理について答えてください。



練習シート（既習項目を思い出させる）

—いままでどんな食べものの言葉を勉強しましたか？思い出しましょう—

